

鹿児島大学歯学部と歩んだ24年間の思い出

| | |
|-----|---|
| 著者 | 三村 保 |
| 雑誌名 | 鹿児島大学歯学部紀要 |
| 巻 | 38 |
| ページ | 21-21 |
| 発行年 | 2018-03-25 |
| URL | http://hdl.handle.net/10232/00030241 |

鹿兒島大学歯学部と歩んだ24年間の思い出

鹿兒島大学名誉教授 三 村 保

鹿兒島大学歯学部は1977年10月口腔生理学と歯科理工学の2講座で発足、1978年4月第一回生80名が入学、学年進行に合わせて先ずは基礎系、次いで臨床系講座が開講、解剖・保存・補綴・口腔外科の第2講座は第1講座の1~3年後となり、1982年の小児歯科を以って全18講座が揃った。

西ドイツ・ヴェルツブルグ大学に留学していた私は1979年10月大阪大学歯学部第一口腔外科に帰学、以後鹿大医学部構内で開かれる(歯学部教授)予定者会議に参加し、1981年3月末に大枝直樹助教授、田中勉助手と竣工直後の慈眼寺官舎に着任、4月に広島大学新卒の椎原保君(故人)が加わり4人でスタートした。

5月連休明けに診療を始めたが初日の患者は0、桜ヶ丘の住民は少なく市内からのバスも不便で、これで学生教育や臨床研究ができるだろうかと思案となった。

折しも日本経済は好調で、診療稼働が低くても教官定員が充足されていなくても、潤沢な講座新設設備費や年間予算が削られることはなかったが、患者確保は病院にとっても当科にとっても喫緊の課題で、急遽夏休みに唇裂口蓋裂治療相談会を開催し約50名の参加を得た。更に伝手を求めて鹿兒島県産婦人科医会の柿木成也先生を訪ねたところ、当科の一貫治療を各支部で説明する機会を設けて下さり、翌年には県内で生まれた唇裂口蓋裂乳児の殆ど全てが当科に紹介されるようになって病床稼働・手術件数が急増した。

当科最初の口蓋裂手術症例となった患者のご両親が、親の会「もみじ会」を立ち上げ手術前会員の支援やミニコミ誌・新聞の定期発行を行い、年一回の総会には当科も参加した。2004年第28回日本口蓋裂学会総会では、会員の協力を得て「もみじ会総会」に替わる「もみじフォーラム」をプログラムに加え、会員と患者6名の講演は学会参加者に深い感銘を与え、我国有数の口唇口蓋裂治療センターとしての評価を更に高めた。

「もみじ会」は世代交代しても存続し、今も患者と家族の支えとなっている。

第一回生卒業までは大学院が無く、教室員や患者も少なく暇な教授達は夫婦揃って食事やお茶に集まる事が多かった。文科省の補助を得て毎年県外の歯科医師会を対象に公開講座を開催し、私は宮崎県歯科医師会の後、香川県歯科医師会(高松市)、高知県歯科医師会(高知市)、愛媛県歯科医師会(松山市)と3年続けて担当、四国の3県では由緒ある格式高い料亭で歯科医師会長始め執行部の歓待を受け、歯学部長以下同行6~8名の教授連中は大いに楽しませて頂いた。これも暇で日程調整が容易だったお蔭だろう。

待ちに待った第一回卒業生は8名が当科に入局、お蔭で九州地方学会時の懇親野球大会に初めてチームを編成・参加できたのは望外の喜びで、その中の植村隆文君、丸谷和弘君は歯学部同窓会の創設と発展に尽力し現在の礎を築いた。

2003年歯学部附属病院長として愛甲孝医学部附属病院長と病院統合作業に当たった。対等合併を基本に人事・予算・病院増改築計画案等を策定、同年10月医学部歯学部附属病院が発足、私は歯科担当副院長となって2005年3月に退職したが、その後情勢が変わって当初案が形骸化した現状に忸怩たる思いが残る。

末筆乍ら、歯学部40周年を共に祝し50周年に向け一層の活躍と発展を祈念します。